

同志社の精神とスポーツ

濱 直樹	同志社スポーツユニオン理事長
講師紹介【はま・なおき】	

同志社スポーツユニオンについて

ただいまご紹介をいただきました濱直樹と申します。私は昭和四十一年、同志社大学体育会アーチェリー部を卒業いたしました。現在、同志社スポーツユニオン理事長を務めさせていただいております。本日、この講演に先立ちまして皆さんにお詫びを申し上げねばなりません。体育会のラグビー部が、決してしてはいけない、大変恥ずかしい不祥事を起こしました。これは同志社の信用を大きく失脚させました。多くの方々にご心配やご迷惑をおかけいたしました、大変心が痛みます。同志社スポーツに携わる者として理事長として心から本当に深く、深くお詫びを申し上げます。このようなことが二度と起こらないように同志社の建学の精神に則り、スポーツマンのモラルをもっと高めていく指導をしてまいりたいと思っております。このことがありまして、すぐにこの講演をお断りするべきではないかと先生方にご相談をいたしました、皆さんのお許しをいただいて進めさせていただきたいと思ひます。

本日は、このようにたくさんの方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。一生懸命務めさせていただきます。この講演の話は三月中頃、同志社小学校の校長先生であります鈴木直人先生から伺いました。鈴木先生は文学部教授でいらっしゃいます。当時、キリスト教文化センターの所長をお務めで、またアーチェリー部の部長も務めていただいております。その先生からのお話であり、お断りすることができず、お引き受けしたのでございますが、はじめは小学校の生徒さんに話をするのかな、ひょっとしたらご父母の方々に同志社スポーツについて話をするのかなと思っておりましたが、いやいや、そうではない、大学の授業の時間、九十分間話をしてほしいと言われて、えらいことを引き受けたなと、それから毎日のように悩んでおりました。一ヶ月くらいしますと学校から正式に依頼状が届きました。講演時間は六十分と書いてございます。ああ、助かったな、とほっとして大変うれしく思いました。ふと私の現役の学生のころを思い出しました。少しでも早く終わってくださる先生はよい先生だなと、ましてやお昼前の二講時目に三十分も早く終わってくださる先生はもっといい先生だと思っておりましたので、本日、皆さんもきっとそうお考えだと思います。しかし六十分、されど六十分。才能のない私が内容のある話もできず、また六十分間の原稿を暗記する能力もございません。お聞き苦しいと思いますが、どうぞ最後までよろしくお願いいたします。

先ほど同志社スポーツユニオンと申しましたが、この組織は私たちが最も信頼をし、尊敬をしております柔道部の大先輩であります佐野修弘さんが会長をお務めになられ、佐野会長のもとで私たち一致団結をしております。今日も佐野さんが心配して激励にお見えいただいております。本当にありがとうございます。このスポーツユニオンの組織と申しますと、同志社大学の体育会に所属する運動部、今年の四月一日から新たにトライアスロン部が正式に加盟して現在五十クラブございます。ちなみに立命館大学は三十七クラブ、関西学院大学は四十一クラブ、関西大学は四十四クラブでございます。この数字を見ましても私たちの同志社がいかに自由な精神、自由な校風、また学生の皆さんの意思を非常に尊重していることがよくわかりだろうと思ひます。その五十クラブを卒業いたしましたOB・OG、約三万二千名、それとそのクラブを物心両面で一生懸命指導してくださっております監督、コーチの皆さん、それに現役の一〜四回生、約二〇〇〇名を一つのグループとしております。私たちはこのスポーツユニオンで一生懸命頑張っておりますが、昨日も佐野会長が京田辺校地で講演をされました。そのときに申しておられましたが、スポーツユニオンには活動方針がございます。

その一つは「強くて勝てる同志社スポーツ」「人をつくり、育てる同志社スポーツ」「楽しくて、また友情を深められる同志社スポーツ」をモットーにしております。そして「世界に通じる選手を送り出す、またすべての面で世界に通じる同志社人を世に送り出す」ことを目的としております。

皆さん、ご承知のとおり、同志社の校章は三つ葉のクローバでございます。知育・徳育・体育、この三つ柱でございますが、最初の知育、これは他の勉学に動しんでおられる学生さんにお任せをして、と申しまして私も私たち、スポーツマンは決して頭が悪いわけではございません。仲間の中に、先輩の中に弁護士や大学の先生やお医者さんや司法書士の先生方たくさんいらっしゃいますが、あとの二つの徳育・体育は私たちスポーツマンにお任せいただきたいと思います。特に道徳面に関しまして、最近、文部科学省が徳育の時間を作るとの話が出ております。これをどのように点数をつけたらいいか。文部科学省も考えておられるようですが、大変結構なことだと思っております。特に道徳面では各クラブがそれぞれ独自の指導方針を持っておられることと思ひますが、私たちユニオンとしてはクラブの三原則を掲げております。

その一つ目として「正しい言葉遣いと礼儀作法を身につけること」。これは本当に道徳的な一番大事なことだろうと思ひます。それに私たちは常識的なことも学生に教えていかねばならないと思っております。たとえば、お祝いのハガキの返信の書き方です。表書きに何々宛と書いてありますが、これにははっきり「様」と書くように。またご欠席、ご出席という「ご」の字を消してもらった方がいいのではないか。ご住所、お名前とありますが、「ご」「お」をはっきり消すように。中にはご芳名という書き方がございます。ご芳名の「ご」だけを消して「芳」を消しておられない場合もたまにあるようですが、やはり「ご芳」をはっきり消した方がいいのではないかと思います。またまた親切と申しますか、お祝いごとのハガキに「ご」という字を「寿」で消しておられる場合もありますが、そこまではよくないのかどうかはわかりませんが、こういう常識も私たちは勉強して教えていかねばならないのではないかと思います。

二つ目は「自ら考え、進んで機敏な行動をとること」。これは大切なことだと思ひます。私の経営する店の若い従業員も、言ったことはしっかりしてくれます。これでいい人物なんです。しかし、自分で考えて行動すれば、もっとよくなるのではないかと、もっと進んで機敏な行動をとってほしいなと思っております。

三つ目に「約束ごとの履行とモラルの高揚と、そして時間を厳守」。これは大事なことだと思ひます。ラグビー部の選手、今日もたくさんきてくれておりますが、モラルの向上をさらに高めていきたいと思っております。

今年の新入生の入学式で大学長の八田英二先生が、「キリスト教主義、自由主義を徳育の基礎とする人間教育に専念する」ことを高々とお話しされました。また「現在、創造力ある人物が待たれている。これこそが同志社の目指す人物像だ」とおっしゃいました。まさしく私たちスポーツユニオンは、これを実践しているところでございます。

新島先生の詩

本日、会場を見渡しますと、ご年配の方もたくさん来ていただいておりますが、現役の皆さんもたくさん来ていただいております。日本中に五〇〇以上もある大学の中から、よくぞ同志社を選んできていただいたことだと喜んでおります。私も校祖新島先生が設立されたこの同志社で学べたことを、本当に大きな喜びと、大きな誇りとしております。また最近、大学の格付け取得が発表になりました。東大や九州大学のようにA A A（トリプルA）をはじめとして私学の雄であります早稲田や慶応と並んで同志社はA A +を取得しております。これは大きな信用であると思ひます。企業で申しますと世界に通じるトヨタ・日立・松下のようではないかと思います。

以前、学生に手渡されている学生手帳の中に新島先生の詩が三つ、四つ載っていたと思ひます。その中で私が好きな詩を三つほど披露させていただきたいと思ひます。その一つは「庭上一寒梅」という詩でございます。

庭上一寒梅（庭上の一寒梅）

笑侵風雪開（笑うて風雪侵して開く）

不爭又不力（争わず又力めず）

自占百花魁（自ら占む百花の魁）

これは新島先生が非常に好きであった梅の花のことを歌われた詩でございます。

また同志社大学の正門を入りましたところに大きな石碑がございます。そこに刻まれております。

良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ

これも大好きな詩でございます。

もう一つは新島先生がお亡くなりになる二週間ほど前に大磯の旅館で詠まれた詩でございます。

いしかねも透れかしとてひと筋に 射る矢にこむる丈夫の意地

この詩はアーチェリー部にとって最も大事にしている詩の一つでございます。と申しますのも前同志社総長でいらっしゃいました松山義則先生が、私たちアーチェリー部の部歌のためにこの詩をいただいて中に入れていただいております。「射る矢にこむる丈夫の意地」でございます。

最近、一回生～四回生に配られている学生手帳の中に、この新島先生の詩が一つも載っておりません。これは非常に残念です。なぜかと聞きますと、最近はCDを皆に渡しているということだそうです。確かにCDもいいと思います。耳から聴くのも大変いいと思いますが、やはり手帳に載せていただいて字を見て覚えていただいて新島先生の思いを理解していただければと思っています。ぜひとも、新島先生の詩を目で見て、耳から聴いて同志社精神を知ってほしいと思います。

私はあまり熱心でないクリスチャンです。クリスチャンと言うのもおこがましいほどですが、十六歳のときに信仰告白をいたしました。家庭が以前からそうでありましたので、何の抵抗もなく受洗をしたわけでごいますけれども、日本には古来、いろいろ宗教がごいます。ところが私にとっては新島先生が宣教師として日本に広められたキリスト教が一番いいのではないかと考えております。イエス・キリストが、常に私を守ってくださっていると思います。

また、私は神様にいろいろをお願いしております。それはどういうことかと申しますと、試合の前日などは「どうぞ、明日はベストコンディションで臨めますように。雨が降りませんように。天気になりますように。試合の途中でおなか痛くなりませんように」といろいろお願いしております。その中で一つでも成就しますと感謝しております。ところがある大雨の試合で、たまたま私が勝つことができました。それからというものは試合の前日に「どうぞ明日、雨が降りますように」と身勝手なお願いも、ずいぶんしておりました。日常生活で何か不幸なことが起されば、ひょっとしたらもっと大きな事故や大変な怪我をしていたかもしれないと神様に感謝しております。

先ほど、新島先生の「庭上一寒梅」を申しましたが、この詩は皆さんもよくご存じだろうと思いますが、「自占百花魁」、これはいろんなものをとにかく押し退けて咲いているのではなく、梅の花は季節の最初に咲く花だと、どうぞあなたが先に咲きなさいと皆に言われて咲いているというような意味だろうと思います。私たちスポーツマンはそのような優しいことではなかなか勝つことができません。しかし人を傷つけたり、いじめたりして勝っていくスポーツは一つもないと思います。やはり自分を磨き、技を上げ、上達してそして自ずから努力をして勝っていくものではないかと考えております。

同志社のスポーツで個人で日本一になったクラブがたくさんごいます。アーチェリー部の女子、ボーリング部の男子、フェンシングの男子、剣道部の男子、射撃部の男子、少林寺拳法の男子、レスリングの男子、自動車競技部の男子、陸上競技部の女子などがごいます。準優勝や三位となりますと、もっともっとたくさんありますけれども、この中で世界に羽ばたいている選手が女子では二名、男子では三名おります。また団体で日本一になっているクラブはアーチェリー部の男子、ボーリング部の男子、フェンシング部の女子、ボートセーリング部、自動車競技部の男子、日本拳法部の女子、ヨットなどでごいます。これも準優勝や三位はたくさんあります。しかし私たち同志社人は、団体ではラグビー部と野球部が勝ってほしいのです。ところがラグビー部は不祥事を起こしました。誠に残念なことですが、これを機会に私たちスポーツマンは猛反省をしなければなりません。しかし学校のグラウンドは使えませんが、学生は今、必死になって練習をしております。合宿所の廊下や人に見えない場所で個人、個人、必死にトレーニングをしております。もし大学当局がお許しをいただけるならば、ぜひこのラグビー部が試合に出て、私たちに夢と感動を与えてほしいと考えております。そのときはぜひ、皆さん、温かいご声援をいただきたいと思います。

同志社は今年で創立一三二年目を迎えます。私たちスポーツユニオンの仲間にも、一〇〇年を超える歴史のクラブが五つごいます。ボート部・柔道部・テニス部・剣道部・相撲部などでごいますが、その中で一番古いのはボート部で、今年一〇八年目を迎えます。また私たち体育会と友好的な応援団は、来年創部一〇〇年を迎えられます。応援団のことですので、チアリーダーの皆さんやブラスバンドの方がすぐく賑やかに一〇〇年を迎えられるのではないかと考えております。その応援団が京田辺で、カレッジソングや応援歌の歌唱指導をしていております。確かに京田辺には一回生が多いので京田辺でしているようですが、ぜひ今出川校地でもカレッジソングや応援歌の歌唱指導をしてほしいと願っております。先だってもOB会長にもお願いしておりましたが、私たちスポーツをやっております学生はカレッジソングや応援歌は高らかに歌うことができますが、残念ながら同志社を卒業したのにカレッジソングが歌えないという人も、たくさんおられるように聞いておりますので、ぜひ三、四回生も対象に歌唱指導をしていただきたいと考えております。また文化部の方では、グリークラブが今年で一〇三年目を迎えます。マンドリンクラブが来年か再来年に一〇〇周年を迎える予定でごいます。

能「庭上梅」と同志社の由来

本日、この講演の演題を、大層な「同志社精神とスポーツ」と掲げましたが、私は卒業後、同志社とかかわって約半世紀になりますが、一度も同志社というものを調べたこともありませんし、資料を見たこともごいません。ただ同志社大好き人間で過ごしてきておりましたけれども、このお話しをさせていただくにあたり、何か資料がないかな、どうしたらいいかなと、いろいろ相談をしておりましたら、同志社の能楽部のOBの方から非常にすばらしい資料を見せていただきました。この資料の一部を披露させていただきたいと思います。

新島先生や同志社英学校ができたときに、用務員としてお仕えになられた五平さんという方のお話でごいます。この能は同志社創立一三〇周年の記念として「庭上梅」という新作を寒梅館で発表されました。そして来年二月十二日、東京の国立能楽堂でも新島誕生一六五周年記念として発表されるそうでごいます。どうぞ機会があれば観に行っていたきたいと思います。

一部、二部の間に五平さんが舞台の袖に出てこられてこう言われます。

変な男がトボトボと舞台へ出て来たが、あれは何者じゃと思ひ召すお方がおられましような。

私は昔、山本覚馬先生や宣教師のデビス先生のお蔭で、寺町丸太町から薩摩藩邸の跡地（今出川校地）に『同志社英学校』が移りました時から、学校の作業員として、時には、旦那様の身の回りをお世話する下男として、お仕え申してきました五平と申す詰まらぬ男ですわ。それにしても、有り難い事じゃ。先生は、八重子奥様と私とを少しも分け隔てなさらず、「八重さん、五平さん」と呼んで下さって・・・。私は毎日、胸の内で手を合わせて居りますのじゃ。

旦那様は、常に「五平さん、人間はイエス・キリストの教義の内の道徳的範囲において自由で無ければいけません。だから『人間の自由』とは道徳と言う、良心に束縛された自由なのです。」と話して下されます。

又、『同志』というのは、中国の古い歴史の本の中にある言葉らしいです。『同徳則同心、同心則同志』と申すらしいのですが、旦那様はこれを「道徳を同じくする者は、心が同じであり、心を同じくする者は、志も同じである。」と言う事だと教えて下さいます。学校名の『同志社』には、そんな意味があったのです。

旦那様はよく『桃李不言、下自為姦』とお書きになられます。「道徳の良心」を持った自由人の周りには、誘わなくても、優れた自由人が集まってくる。」とお思いになっていらっしゃるのだと、私の様な無学な者にも、『同志社』をお創りになられたのは、このようなお心からだったのだと言う事は良く解りますわ。

でも、アメリカから帰ってみてからも、順調に学校が創れた訳ではありませんでしたのじゃ。

「五平さん、私が『同志社』を創るのに後押しして下さったのは、一八七四年十月九日、アメリカン・ボードの大会（全アメリカの宣教師が集まる大会）の席で、神学校を卒業して日本へ派遣される新しい宣教師として、私が日本にキリスト教主義の学校を創るための援助をお願いした所、千ドル・五百ドルと、忽ち、五千ドル近い寄付金が集まった。そのお金を差し出して下さった人々の善意が大きいんだけど、私の挫折しそうな心を支えて下さったのは、一人の見すばらしい年の老農夫が、所持金の全部である帰りの汽車賃二ドルを私の手に握らせて、心配は要らん。わしの脚はまだ衰えては居らん。僅かで恥ずかしいが役に立てて呉れと言ひ捨てて、家路を指して歩み去って行かれたその農夫のお姿は、感激の涙で段々と震んでいったけれども、今でも脳裏に焼きついてます。教育は一〇〇〇ドルの必要性と共に、二ドルの尊さが解る感性を育てねばならないのです」と、私の顔をじっと見詰められましたわ。

旦那様が私を可愛がってくださったのは、初めの内は思いもしなかった事じゃが、私を御覧になる度に、その時、立ち去って行かれた老農夫のお姿と、私の姿とを重ねていらっしやったからではないかと、そんな気持ちが、この頃するので御座いますよ。

イヤ、この様な独り言を言っている内に、早や夜も更けたわい。一回りして、私も休む事にしようぞ。

私もこの資料を見せていただいて、「同志社」という学校の由来を初めて知りました。私が三回生のときに、ある運動クラブの先輩が、北の果ての宗谷岬から南の果ての佐多岬まで約三〇〇キロを歩いて縦断されました。私たち運動部もその上田先輩に随行しようということで、各クラブが四、五名ずつメンバーを出して、その先輩が歩かれる、どこからどこまではこのクラブの誰々ときちときめ細かく割り当てまして、二人で道中を歩いたのであります。私は行っていませんが、うちのクラブからも三名出ました。北海道では同志社は名が通っているようです。大きなリュックを背負って「同志社」という旗を立てて、キャラバンシューズを三つぶら下げて二人が同じ恰好で道中を歩いた。ところが東北から関東に入ってから同志社というのが、キャラバンシューズのメーカーの会社だと思っておったようです。ところが南に下がり、近畿に入り、九州に入りますと、それは大変なことで、同志社ということで、大いに歓迎されたということでごいます。

この会場をふと見渡しますと、京都教会の牧師の先生が来ておられるのでびっくりいたしました。実は私も京都教会の会員でありますけれども、鈴木先生や同志社の多くの先生方が通っておられる、京都で一番古い京都教会。この機会ですから、皆さん、ぜひ一度教会に足を運んでいただいたらどうでしょう。またこの京都教会には、校祖新島先生の頭髪が納骨堂に納められております。ぜひこの機会に一度行ってみてください。牧師の入先生は非常に心の優しい先生ですので、きっと皆さんを温かく迎えてくださると思います。

今日のこの話、ひょっとしたら大分抜かしていたかもしれませんが。家で何度か練習いたしまして、うまく納まったときや、早く終わって時間が余ったとき、今日はえらく時間が残ってしまつて、このようなことがあろうかと、二つ、三つ、雑談をさせていただきたいと思います。

アーチェリーの歴史

私はアーチェリー部出身です。アーチェリーの歴史をお話したいと思います。アーチェリーは昭和三十三年、現在のヤマハ、川上源一社長がアメリカから洋弓を持って帰られました。楽器の技術でもって洋弓の道具をお作りになられました。そして関東では明治大学・早稲田大学、関西では関西学院大学と同志社にその道具を寄付していただき、アーチェリーを普及させてほしいということでした。ヤマハには大きな練習場をつくっていただいて、その練習場で私たちも練習をさせていただいた思い出があります。またアーチェリーの競技は日本では三つの競技をしています。アメリカではあと二つあるのですが、その一つがターゲットアーチェリーと申しまして、平らな運動場で男子は九〇メートルから女子は七〇メートルから射るターゲット競技がございます。そしてフィールドアーチェリーは皆さんもゴルフでお馴染みだと思いますが、野山に設置した十二カ所の的を一つずつ射って回っていく競技でございます。もう一つはインドア競技、おもに冬場の競技でございますが、体育館などで一ハメートルの距離を打つ競技でございます。日本ではこの三つが主流でございますが、以前は日本もクラフト競技をやっておりました。これは現役の皆さんもご存じないと思いますが、何年か前まで実業団で実際にやっておりました。これは五〇、六〇メートル離れた場所に大きな円を描きまして、その真ん中が五点、四点、三点。そしてこちらからスツと矢を放ちます。普通の矢は非常によく飛びますので、矢の後ろに飛ばないように羽根をつけて射ちます。それで点数を競った試合でございます。ところが日本では場所もありませんし、危ないということで今はやっておりません。もう一つはフライト競技。これはただ単に遠くへ飛ばすだけの競技です。日本ではとてもできません。私たちが現役のときに使っておりました弓ですら、大体三〇〇～四〇〇メートルは飛びます。現在、使っております現役の弓であれば七〇〇～八〇〇メートルはゆうに飛ぶと思います。誰も試したことはございませんが。ところがアメリカではフライト競技はございます。ただ飛ばすだけの競技ですが。どのくらい飛ぶか、皆さんご想像になりますか。約二キロ飛ぶのです。とても日本ではできません。砂漠あたりでドンと飛ばして車で取りに行くのではないかと。見たこともありませんが、そのような競技がございます。

同志社と地域

同志社は地域の方々をどのように思っているかはあまりわかりませんが、私は洛星中学校・高等学校の同じ町内に住んでおります。洛星中高は年に何回か行事をされます。そのたびに私どもの家のポストに、ひと月ほど前にこういう活動がある、行事があるといったポストに入れてくださいます。学園祭・体育会・バザー、それに大文字の送り火のときには、四階の屋上を一般に開放されて大文字の送り火の鑑賞もしておられるようです。一度家内とバザーに行きました。そしたら多くの方がこられて皆さんを洛星中高のチャペルに入場させて、順番に二列くらいずつバザーの会場に入って行きますが、チャペルで待っている間に神父さんが、洛星中高のことや、キリスト教のことについてわかりやすく皆さんにご説明をされておりました。あれも大変よいことだなと思っております。

また立命館大学の近所でもありますので、立命館大学もいろいろと案内のチラシを入れてくださいます。マンドリン部が公演している、講演があるとか、応援団がやっているとか、チラシが入ります。一度ぜひ行きたいなと思っております。実は半年ほど前に久々に同志社の明徳館の地下の食堂に行きました。私の学生のころはそこばかり利用していましたが、行ってびっくりしました。非常にきれいになって明るくなっております。そして感激したことは、自分の好きな食べ物をプレートに乗せて重さをはかって、その重さでお金を払う。なかなかユニークなやり方だな。これはぜひ孫たちも一度連れてきて、バイキングをさせてやりたいと思っております。同志社は、こういう素敵な食堂を地域の方々にもっと開放したらどうでしょう。たとえば地域の方々に割引券をポストに入れるとか、たまには三〇〇円か五〇〇円のサービス券をポストに入れて、どうぞこの食堂にきてください。同志社をぜひ知ってください、というような案内をされたらどうでしょうか。そして、「おお、同志社というのはすばらしい。こんないい大学にぜひ入りたい」という子どもさんがおられたら、地域の方々にはテストを受けてプラス十点くらいあげたらどうかな。また同志社に一生懸命奉仕をしている者には、さらにプラス三点ほど、またスポーツユニオンの会長や理事長の孫や曾孫にさらにプラス三点ほどもらえたら嬉しいのですが・・・など、独り言を申しております。

エリート同志社マン

もう一つだけ、時間がありますので話をさせていただきたいと思います。たまたま京都中央信用金庫の出町支店長もお越しいただいております。銀行にまつわるエピソードを話させていただきます。あるユダヤの老人がニューヨークに越してきました。ひょっとしたらバツレヘムからこれたのかもわかりません。イエス・キリストの子孫の方かも知れませんが、ニューヨークに越してこられました。その方がある銀行に入り、貸付係のところにいて「お金を借りたいのだが」「わかりました。いくら必要でしょうか」「一ドルだ」「一ドルですか」「そうだ」「何か担保はありますか」「ここにある」。大きな鞆を出されて中には国債や証券など、合計しますと約一〇〇万ドルほど入っていました。「これが担保だ」「わかりました。それじゃ、一ドルですね。利息が年六パーセントかかりますので六セント頂戴いたします」「わかった」と言ってその老人が六セントを払い、一ドルを持って帰ろうとしたとき、それを聞いていた支店長が、その老人に「ぜひ五十万ドルでも六十万ドルでもどうぞお使いください」「いやいやそんなお金は必要はない。私はニューヨークに来て、この大きな重たい鞆を持っていたが、この債券を入れる金庫を買おうとしたら、非常に高く、ふと銀行の金庫を使わせてもらえることに気がついたのだ。来年には一ドルを持ってまいりましょう」と言って立ち去った。これはユダヤ人らしい頭のよさではないか。私たち同志社の卒業生も、このくらいのことは考えてほしいと願っています。

先ほどの五平さんではありませんが、ずいぶんつまらぬ話をしたもんだな、私のネタもいよいよつきてたわい。このへんで話を終えることにしようぞ。

天にまします私たちの新島先生、本日はこのような機会をお与えいただき誠にありがとうございました。お蔭様で皆さんにも最後までお聞きいただき、心から感謝を申しあげます。私もこれで今夜、やっとゆっくり眠れそうでございます。また同志社の精神、キリスト教の精神、新島先生の精神、同志社スポーツの精神が少しでもおわかりいただけましたでしょうか。本日、ここにお越しの一人おひとりの皆さんに、豊かな恵みとやすらかな平安がたくさんありますようにお祈りをして私の話を終わらせていただきます。本日は本当に長時間、ご清聴ありがとうございました。

二〇〇七年六月十五日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録